

第5章 教育制度の特色

これまで述べてきたとおり、シンガポールにとって人材は最大の「資源」であり、シンガポール政府は教育政策を大変重視している。本章ではシンガポールの教育制度の特色を紹介する。

第1節 選抜システム

初等学校から各段階で試験があり、その成績で進路が決められていくことは先述のとおりである（第1章第3節）。

1 初等教育段階でのコース分け

子どもにとって最初の能力別コース分け（ストリーミング）は、初等学校のオリエンテーション段階（5・6年生）から始まる言語ストリームにおいてである。ストリーミング方法について、以前は国が作成した試験で行っていたが現在は各学校の判断（学業成績、試験）に任されている。

2004年、初等教育の4年生終了時に受ける学力成績・試験の結果に基づいたストリーミング制度を一部改正し、これまでの3ストリームから上位2ストリームを統合した合計2ストリーム制とした。3ストリームとは、高度の母語を学ぶEM (English, Mother Tongue) 1、一般レベルのEM 2、学力のレベルが低いEM 3であるが、このEM 1とEM 2が統合された。この改正について教育省は、両コースで学ぶ生徒の学力に大きな差はないためと説明している。また、EM 3を残す理由について、EM 3の生徒とEM 1、2の生徒間の学力には差があり、異なったカリキュラムや教育方法で学ぶことにより、EM 3の生徒は恩恵を受けることができるとした。

EM 1とEM 2の統合によって、EM 3の生徒のモチベーションが下がることが懸念されるが、教育省の担当者によると³、EM 3には生徒のやる気を高めることができる優秀な教員を配置する等の配慮をしているということである。

EM 1とEM 2が統合される前、EM 1には約20%、EM 3には約7%、EM 2には残りの大多数の生徒が振り分けられていた。前述の教育省の担当者によると、EM 3と判断される生徒は実際は約12%いるのだが、親の希望で約7%しかEM 3で学んでいなかったとのことである。EM 3で学ぶかどうかの最終的な決定権は親にある。親の希望でEM 2に入ったものの、EM 3に戻ることを希望する生徒もおり、EM 3で学ぶことにより、勉強に遅れることなく学校に通うことができ、自信をつける生徒も多いという。

EM 1&2とEM 3の違いは次のとおりである（図表5-1-1「初等学校のストリームの違い」参照）。ME 3とは、学校が必要に応じ設けることができるストリームで、このストリームの生徒の学習は各母語で行われる。

³ 2004年8月教育省訪問時の聞き取り調査による。

図表 5-1-1 初等学校のストリームの違い

EM 1 & EM 2 ストリーム ⁴	このストリームの子どもは、英語と母語（マレー語、中国語、タミル語）を学ぶ。
EM 3 ストリーム	このストリームは、語学と数学の成績が劣っている子どもを対象としている。このストリームの子どもは、基礎的な英語と母語を学ぶ。母語教育においては、話す、読む、聴くという能力の向上に力点が置かれる。
ME 3 ストリーム	学校は必要に応じ、このストリームを設けることができる。5年時にEM 3に属するよう学校から指示された生徒は、ME 3ストリームを選択することができる。このストリームの子どもは、上級母語と基礎英語を学ぶ。学習は各母語で行われる。

注：EM は、English, Mother Tongue の意。ME は、Mother Tongue, English の意。

出所：教育省 Website <http://www.moe.gov.sg/>

初等学校の年齢別、ストリーム別の生徒数は次のとおりである（図表 5-1-2 「初等学校の年齢別、ストリーム別生徒数（2003 年）」参照）。2003 年は制度改正前のため、子どもたちは EM 1、EM 2、EM 3 の 3 つのストリームに振り分けられている。

⁴ EM 1 と EM 2 については、2004 年より統一された。

図表 5-1-2 初等学校の年齢別、ストリーム別生徒数 (2003 年)

(上段は合計、下段は女子で内数)

年 齢 学 年	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	合計
1年	48,091	570	263	103	17	—	—	—	—	—	49,044
	23,132	248	124	45	8	—	—	—	—	—	23,357
2年	1	47,884	699	283	137	22	1	—	—	—	49,027
	—	23,020	355	128	65	6	1	—	—	—	23,575
3年	—	2	48,608	689	410	195	29	—	—	—	49,933
	—	—	23,524	320	202	83	11	—	—	—	24,140
4年	—	—	2	48,979	776	384	249	62	—	—	50,452
	—	—	1	23,717	370	166	110	29	—	—	24,393
5年	—	—	1	3	48,267	869	567	325	78	1	50,111
	—	—	—	1	23,452	380	275	135	38	—	24,281
EM 1	—	—	1	1	10,506	168	82	35	5	—	10,798
	—	—	—	—	6,082	91	37	15	3	—	6,228
EM 2	—	—	—	2	34,742	598	440	278	73	1	36,134
	—	—	—	1	16,307	255	218	116	35	—	16,932
EM 3	—	—	—	—	3,019	103	45	12	—	—	3,179
	—	—	—	—	1,063	34	20	4	—	—	1,121
6年	—	—	—	—	6	48,056	2,028	941	246	95	51,372
	—	—	—	—	1	23,385	844	374	115	41	24,760
EM 1	—	—	—	—	1	8,587	183	90	25	2	8,888
	—	—	—	—	—	5,071	98	41	14	2	5,226
EM 2	—	—	—	—	5	35,061	597	383	199	85	36,330
	—	—	—	—	1	16,743	279	178	97	35	17,333
EM 3	—	—	—	—	—	4,408	1,248	468	22	8	6,154
	—	—	—	—	—	1,571	467	155	4	4	2,201
合 計	48,092	48,456	49,573	50,057	49,613	49,526	2,874	1,328	324	96	299,939
	23,132	23,268	24,004	24,211	24,098	24,020	1,241	538	153	41	144,706

出所：シンガポール教育省 'Education Statistics Digest 2003' 2004 年

2 初等学校卒業試験

初等学校修了前に子どもたちは、初等学校卒業試験 (Primary School Leaving Examination : PSLE) を受けることになる。この試験の結果によって、中等学校への進学可否や中等学校でのコース分けが決定されるため、子どもの進路決定に及ぼす影響は

大きい。教育省の担当者によると⁵、試験の結果は点数で示される客観的なもので、保護者等からのクレームは特にないという。

初等学校卒業試験の試験科目は次のとおりである（図表 5-1-3 「初等学校卒業試験（PSLE）の試験科目」参照）。

図表 5-1-3 初等学校卒業試験（PSLE）の試験科目

ストリーム	試験科目
EM 1 & EM 2	英語、数学、科学、中国語、マレー語、タミール語、非タミールインド語（パンジャブ語、ヒンドゥ語、グジャラト語、ベンガル語、ウルドゥ語） 上級中国語、上級マレー語、上級タミール語
EM 3	基礎英語、基礎数学、基礎中国語、基礎マレー語、基礎タミール語 基礎非タミールインド語（パンジャブ語、ヒンドゥ語、グジャラト語、ベンガル語、ウルドゥ語）

出所：シンガポール試験評価委員会（SEAB）Website <http://www.seab.gov.sg/>

初等学校終了後の子どもたちは、初等学校卒業試験の成績によって次の4コースに分かれて中等教育を受けることになる。

（1）スペシャル・コース

スペシャル・コースは、初等学校卒業試験で上位約10%の成績を収めた生徒のためのコースである。修業期間は4年間であり、上級レベルの英語と母語を学ぶ。4年生の終わりにシンガポール・ケンブリッジ「普通」教育認定試験（GCE-O）を受験することになる。

（2）エクスプレス・コース

エクスプレス・コースに振り分けられる生徒は、全進学者の約50%である。スペシャル・コースの生徒と同様、4年間で卒業し、GCE-O レベルの試験を受験することになるが、学習する英語と母語のレベルは、スペシャル・コースに比べてやさしい。

（3）ノーマル・コース（普通）

ノーマル・コース（普通）に振り分けられる生徒は、全体の約22%である。このコースの生徒は、4年生の終わりにシンガポール・ケンブリッジ「標準」教育認定試験（GCE-N）を受験することになる。GCE-N レベルの試験において一定の成績を修めた生徒は、5年生に進級し、5年生の終わりにGCE-O レベルの試験を受験することができる。さらに、その試験で優秀な成績を修めた生徒は、ジュニア・カレッジ、ポリテクニク等に進学することもできる。5年生に進級しなかった生徒は、技能教育研修所（ITE）等にて、技術

⁵ 2004年8月教育省訪問時の聞き取り調査による。

教育及び職業教育を受けることができる。

(4) ノーマル・コース (技術)

ノーマル・コース (技術) に振り分けられる生徒は、全体の約 18%である。卒業後に技能教育研修所 (ITE) にて教育を受ける生徒のためのコースである。4年生の終わりに GCE-N レベルの試験を受験し、優秀な成績を修めた場合には、5年生に進級し、GCE-O レベルの試験を受験することもできる。

中等学校の年齢別、コース別の生徒数は次のとおりである (図表 5-1-4 「中等学校の年齢別、コース別生徒数 (2003 年)」 参照)。



パソコンを利用した授業風景 (Yishun Junior College)

図表 5-1-4 中等学校の年齢別、コース別生徒数 (2003 年)

年 齢 学 年	1 1	1 2	1 3	1 4	1 5	1 6	1 7	1 8	1 9	2 0	合計
1年	21	48,827	1,833	925	294	76	5	3	0	0	51,984
スペシャル	6	4,362	123	59	14	1	—	—	—	—	4,565
エキスプレス	11	26,940	643	467	177	45	2	1	—	—	28,286
ノーマル普通	4	11,795	472	165	78	17	2	1	—	—	12,534
ノーマル技術	—	5,730	595	234	25	13	1	1	—	—	6,599
2年	—	31	45,251	2,528	1,106	318	97	3	1	0	49,335
スペシャル	—	11	4,164	161	51	16	5	—	—	—	4,408
エキスプレス	—	18	24,630	718	441	166	54	5	—	—	26,029
ノーマル普通	—	2	10,724	612	256	118	34	1	—	—	11,747
ノーマル技術	—	—	5,733	1,037	358	18	4	—	1	—	7,151
3年	—	—	32	49,357	3,530	1,232	334	121	2	0	54,608
スペシャル	—	—	8	4,630	315	162	16	6	—	—	5,137
エキスプレス	—	—	21	26,198	1,405	483	155	62	1	—	28,325
ノーマル普通	—	—	3	11,690	1,277	419	143	40	—	—	13,572
ノーマル技術	—	—	—	6,839	533	168	20	13	1	—	7,574
4年	—	—	—	29	38,359	3,411	1,044	259	97	8	43,207
スペシャル	—	—	—	5	3,508	260	169	11	2	—	3,955
エキスプレス	—	—	—	20	20,223	1,350	358	136	52	1	22,140
ノーマル普通	—	—	—	4	9,036	1,156	278	97	36	3	10,610
ノーマル技術	—	—	—	—	5,592	645	239	15	7	4	6,502
5年	—	—	—	—	5	6,288	801	143	37	18	7,292
ノーマル普通	—	—	—	—	5	6,288	801	143	37	18	7,292
合 計	21	48,858	47,116	52,839	43,294	11,325	2,281	529	137	26	206,426

出所：シンガポール教育省 ‘Education Statistics Digest 2003’ 2004 年

3 中等教育修了資格試験

中等教育以後の教育機関への進学者を選抜するために、シンガポール・ケンブリッジ教育認定試験 (Singapore-Cambridge General Certificate of Education : GCE) が採用されている。これには、N (Normal) ⁶レベル、O (Ordinary) ⁷レベル、A (Advanced) ⁸レ

⁶ 試験科目は、英語は必須、ノーマル(普通)コースの生徒はその外最低3科目、ノーマル(技術)コースの生徒は、数学とその外最低1科目を選択する。

⁷ 試験科目は、英語は必須であるがその外の科目は、進学先 (ジュニアカレッジ、ポリテクニク等) により異なる。

ベルの3つのレベルがある。

上述したように、中等教育機関のノーマル・コース（普通）及びノーマル・コース（技術）で学習した生徒は、GCE-N レベルの試験を受験し、この試験の成績によって、その後、技能教育研修所（ITE）等にて、技術教育及び職業教育を受けるか、5年生に進級するかが決定する。

一方、中等教育機関のスペシャル・コース、エクスプレス・コースで学習した生徒は、GCE-O レベルの試験を受験することになる。この試験の結果が、大学準備教育機関（ジュニア・カレッジ、教育学院、ポリテクニク）の入学者選抜にあたっての資料となる。

大学準備教育機関の学校別、年齢別の生徒数は次のとおりである（図表 5-1-5 「大学準備教育機関の学校別、年齢別生徒数（2003年）」参照）。

図表 5-1-5 大学準備教育機関の学校別、年齢別生徒数（2003年）

年 齢 学 校	1 5	1 6	1 7	1 8	1 9	2 0	2 1	合 計
ジュニア・ カレッジ	28	9,979	11,819	1,540	295	41	6	23,708
1 年	28	9,949	1,207	311	34	10	—	11,539
2 年	—	30	10,612	1,229	261	31	6	12,169
教育学院	1	193	285	244	107	21	—	851
1 年	1	193	110	33	2	—	—	339
2 年	—	—	174	78	36	1	—	289
3 年	—	—	—	133	69	20	—	223
大学準備教育 合 計	29	10,172	12,104	1,784	402	62	6	24,559

出所：シンガポール教育省 ‘Education Statistics Digest 2003’ 2004年

4 大学受験資格試験と大学入学者の選抜

大学準備教育機関であるジュニア・カレッジや教育学院で学んだ生徒は、GCE-A レベル試験を受験することになる。この GCE-A レベル試験が大学受験資格試験となる。この試験を受験し、大学受験資格を得た後、シンガポール国立大学（NUS）、ナンヤン工科大学（NTU）、シンガポール経営管理大学（SMU）に出願することができる。

シンガポール国立大学では、この GCE-A レベルの試験の成績（65%）、プロジェクト・ワークの成績（25%）、課外活動（Co-Curricular Activities : CCA）及びナショナル・サ

⁸ 試験科目は、英語論文、母語は必須、その外、数学、物理、化学、生物、歴史、英文学、美術デザイン、音楽などの科目のなかから最低2科目を選択する。

ービス⁹のポイント（10%）を総合し、大学が入学者の選抜をしている。

プロジェクト・ワークの成績は、2005年の大学の入学選抜から新たに採用されることになった。プロジェクト・ワークは、ジュニア・カレッジ及び教育学院で授業の一環として行われるもので、創造力を鍛え、さらに批判的に考える能力を身に付けることを目的としている。生徒は、プロジェクト・ワークの過程、成果について学校から5段階で評価される。

第2節 選択肢

これまで述べてきたように、シンガポールでは、いかにエリートを選抜・養成していくかに教育の重点を置いているような感がある。運動や芸術の才能は軽視されがちであったことは歪めない。

しかし、国民の価値観の多様化に伴い、子どものさまざまな才能や素質を伸ばさせるため、近年、特定の分野に秀でた能力を持つ子どものための学校が次々と開校している。この学校では、初等学校卒業時から子どもの能力を最大限に伸ばすため、独自のカリキュラムを組んでいる。2004年1月のシンガポールスポーツスクール開校、2005年1月のNUSハイスクール開校、また2007年開校予定の芸術分野の学校について、先述のとおりである（第3章第2節）。

第3節 言語

授業は公用語のひとつである英語でなされる（図表5-3-1「シンガポールの言語」参照）。しかし、シンガポールは華人系、マレー系、インド系及びその他の複数民族とで構成されている多民族国家であることから（図表5-3-2「シンガポールの民族比率（2003年）」参照）、それぞれの民族の文化的な背景・アイデンティティを尊重するため、英語と同時にその母語を初等学校1年生から学ばせている。

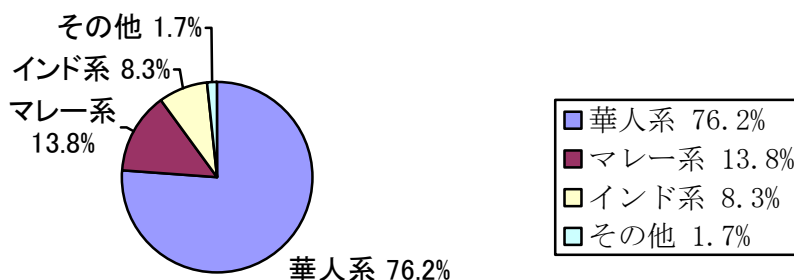
図表5-3-1 シンガポールの言語

国語	マレー語
公用語	マレー語、中国（北京語）、タミール語、英語
行政用語	英語
識字率	94.2%（2003年）
バイリンガル率	56%（15歳以上）（2000年）

出所：Singapore Department of Statistics ‘Yearbook of Statistics Singapore’ 2004年
Singapore Department of Statistics ‘Census of Population 2000’ 2001年

⁹ シンガポールでは、ナショナル・サービス、いわゆる徴兵制度を採用している。男性で18歳以上の全ての健康な国民及び永住権保持者は、2年または2年半のナショナル・サービスに服さなければならない。このため、男性のGCE-Aレベル試験合格者の場合、ナショナル・サービスの期間を終えてから大学に入学する者が多い。

図表 5-3-2 シンガポールの民族比率 (2003 年)



出所 : Singapore Department of Statistics 'Yearbook of Statistics Singapore' 2004 年

第4節 IT教育

1997年、ITを活用した教育により21世紀に向けて求められる能力を生徒に身に付けさせることを目的として、「IT教育マスタープラン」が発表された。ますますボーダーレス化する世界を生きる上で求められる視点を養うほか、情報にアクセスし分析する能力、得た情報を応用する能力を養うことを目的とする。初等学校は6.6人に1台、中等学校は5人に1台のパソコンを設置することなど、IT教育の基礎となる設備面の強化に重点が置かれた。

2003年、「IT教育マスタープランⅡ」が発表され、「IT教育マスタープラン」により充実したIT教育設備の有効利用に取り組むとした。またITによって校内、学校間、教育省と学校とのコミュニケーションを一層密なものにし、効率的な学校管理も図っている。

これまでの取組みの結果、学校教育の中で教員はパワーポイントやインターネットを頻繁に授業で活用するようになっている。教育省は学校に対し、具体的なIT指導計画や数値目標等を示していないが、担当者¹⁰によると生徒は初等教育6年生でワード (Word) やパワーポイント (Power Point) による文章作成等はできるようになるということである。

¹⁰ 2004年8月教育省訪問時の聞き取り調査による。